
悲壮の狂死曲

深月姫季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲壮の狂死曲

【Nコード】

N8364D

【作者名】

深月姫季

【あらすじ】

著者の病気により無期限活動停止としていましたが、20091018より復帰することにしました。ご迷惑をおかけしました。

この作品は『流血の終焉』の続編です。

FILE. 1 陰の影

アンティーク調の家具が際立つマンションの一室で、ジンを招き入れた女は思わず立ち上がった。

「ジン：今なんて言ったの？」

血のように紅い唇が艶やかに揺れた。納得できないというようにしなやかな髪を振る。その顔には驚愕の色がありありと浮かんでいる。ジンは質問に答えようとはせず、下ろした腕の先の煙草を手放し、足で踏みつけた。カーペットに焦げた跡と黒い煤が残り、女は不快感を露わにした。

「手を引いたですって？―手を引いた。冗談じゃないわ。あの人生き返らせるには絶対にこの計画の成功が必要なのよ、解っているでしょう？」

怒りで小刻みに身を震わせる女を、ジンは暫く見下ろしていた。

「冷静になれ。手を出す必要性が無いだけだ。表向きのアジトは消えた。FBIの虫共は組織が壊滅したと安心して、数日後には帰国するだろう。裏の存在に気付いている者もない。そして」

意味ありげな間に、女は吐息も漏らさずじっと聞き入った。

「あの餓鬼も、すぐに事切れる。 APTX4869の裁きでな」

含み笑いが低く響いた。だが女は対照的に表情を陰しくする。

「まさか…あの薬に別の効果があるの？聞いてないわよ、そんな事は」

「安心しろ、お前の心配する事に関しては何ら問題は無い。死ぬのはあの男だけだ。それより、そろそろ動き出す。裏の研究の為に」

素っ気無いジンの態度に毒された様子は無く、女は深く頷いて机の中から一束の書類を取り出した。

「順調よ。あの子が放り出した研究は他の研究者達で続けさせたし、大部分は完成した。後は、協力者を連れてくるだけ…。探られるのは面倒ね。FBIの帰国、それにその例の男が死ぬまでは決して表に出ないようにして」

「当然だ。邪魔者が消え次第、シェリーをこの手で連れ戻す」

女は満足げに勝ち誇った。その瞳は計画の成功を確信し燃え滾っている。

「そうね…もう一人の方は私が直々に連れ戻しましょう。きっと驚くわね…」

机の上に飾ってある二枚の写真、その片方に、自分と写っている人物。それをゆっくりと指で撫でる。

「Welcome home」

FILE. 1 陰の影（後書き）

さて、かなりの時が過ぎて、
ようやく掲載することが出来ました。

ただ、暫くは毎日更新…というわけには行かない模様です。

携帯投稿させて頂きましたが、

帰宅してからPC修正している自分がいて…

結論、PCの方が使いやすいです。

3／23日から引越しのため10日間ぐらいPC不能となります。

それまでにもう数話up出来れば…

ただ車校、引越し関係、手続きetc

立て込んでいて難しいかもしれません。

更新停滞することで、読者様にご迷惑をおかけします。

申し訳ありません…。

最後に、私事ですが、

志望していた看護系の某に合格致しました。

二次創作も看護師への道も日々之精進致します♪

FILE. 2 秘密文書

時の流れに人は逆らえないもの、それを無理矢理ねじ曲げようとすれば人は罰を受ける――

ジンがその言葉を投げかけて十日。コナンはすっきりしない体調のまま、その言葉の意味を考えあぐねていた。コナンの身を案じて大阪に帰ることを頑なに拒んだ平次に、コナンは静かに笑いかけた。

「バーロー、出席日数足りなくなるぞ。ただでさえ事件にかまけて少ないんだろ？オレなら平気だ」

気丈に振舞ってはみたものの、顔色の悪さは隠せない。それを平次に悟られたなくて、コナンはしっかりとマフラーで顔を半分かくして見送った。

一連の事件後、どうしてもコナンには解せないことがあった。ジンの吐いた科白、余裕綽々な態度から、自分が体調不良に陥った理由はAPT X 4869―あの忌々しい毒薬のせいだと簡単に見当がついた。しかし、何故自分だけなのだろう。灰原は自分より遅くに縮んだわけだから比較することは出来ないとして、少なくともベルモット―シャロンと呼ぶべきか―は副作用などに冒されているとは聞いていない。

証拠が無い以上、幾ら考えても無駄なことか。そう考え、コナンは空港を後にした。毛利探偵事務所には暫く帰っていない。平次と共に博士の家に転がり込んでいたからだ。そして、今後も帰るつもりもなかったが、博士に熱心に帰るように諭され、半ば仕方ないか

という投げやりな気持ちで帰ることを決意した。自分の知らない間に蘭と博士が何を話していたのかは知らないし、聞くつもりも無かった。

「…ただいま」

いつもよりも重い扉を開ける。昼間だというのに毛利はビールの缶を片手にテレビに釘付けになっていた。

「ボウズ、久しぶりだな。蘭が心配してたぞ。ガキの分際で家出なんかしやがって」

「ごめんなさい…」

笑ってごまかしながら、その場をやり過ごす。が、身体の奥から何かが突き上げる感じがして、コナンはすぐに自室へ走った。

「ゴホゴホ…ッ」

何度か咽返ったあとで、何度か深呼吸を繰り返す。胸の痛みが途端にまして、コナンはベッドサイドに腰をかけた。

「俺の身体は、どうしちまったんだ…」

痛みを堪える様に大きく息を吐いたとき、ドアのノックが聞こえ、狼狽した。

「コナンくん?…お帰り。開けてもいい?」

「ちょっと待って」

もう一度呼吸を整え、胸の痛みが引いていくのを確認して、コナンはドアを開ける。そこには難しい顔つきの蘭が立っていた。

「どうしたの、蘭ねえちゃん」

蘭は戸惑い気味に振り返った。

「ジョディ先生が、コナンくんに話があるんだって」

蘭に礼を言いながらコナンはゆっくりと階下に向かう。一体何の用だろうか。

「Hi！ごめんなサイン。急に来テ」

怪訝そうな蘭の手前、たどたどしい日本語で話すジョディにコナンは苦笑する。

「ううん、ボク、暇だったから。それで」

「コナンくんに何か？」

訝しげに蘭が口を挟んだ。ジョディは蘭をじっと見ていたが、何でもない風に微笑んだ。

「この前、彼がでくわシタ事件のことデ、モウ一度聞きタイことがあるって、高木刑事が行ってマシタ！でも、忙しいみたいデ、警視

庁に送ってくれって偶然会った私に頼んだネ!」

「先生待ってて。すぐ用意するから!」

コナンは部屋に戻って新しい携帯をポケットに入れた。思いのほか蘭が鋭く目を光らせている事に内心は舌を巻くと同時に、警戒心が沸き起こる。ジンがああ言ったとしても余計な事に蘭を巻き込みたくは無い。

「それじゃ、毛利サン、Cool kidをお借りします」

「いってきます」

軽く蘭に手を振り、階段を駆け下りる。もうジョディはプロの顔になっていた。

「ジョディ先生、何かわかったの?」

コナンの言葉に、ジョディは軽く頷いた。

「ええ、色々とね…車に乗って。外じゃ色々と危険だから」

探偵事務所の前に着けてある黒塗りの車、ジョディは後部座席の扉をコナンの為に開け、自分は運転席に乗り込む。後部座席には先客がいた。

「赤井さん…怪我はもういいの?」

電話では無理していたため、傷が悪化して目下入院中だと聞いていた。だが、今の赤井は全くそんな素振りを見せない。コナンに早く乗るように促した。

「シュウったらまだ入院しなきゃいけないのに、無理やり退院しちゃったのよ」「ジョディの話が興味深かったからな」

コナンはその話を聞きたいと言わんばかりに目を輝かせた。

「シュウや君を病院に運んだ後で、日本のFBI捜査員がくまなく瓦礫を一斉搜索したの。一人ひとり可能な限り身分を確認していったけれど、ジンたち幹部クラスの人間はいなかったわ。比較的被害の少なかった地下の一室では興味深いものが発見されたわ」

「興味深いもの…?」

ジョディはルームミラーから意味ありげに赤井に目配せした。

「―これだ」

足元のアタッシェケースから、何かのコピーらしき紙の束を取り出した赤井はコナンに手渡した。表紙には研究日誌と書かれ、中には几帳面な字の詰まった日記のような事が書き連ねてある。

「日誌だけじゃない。埋もれていた財宝は」

差し出された資料をじっと見て、コナンは全身から血の気が引くのを感じた。

「唯一仲間が入手に成功したけど…APT X4869という薬品のデータのようによ」

黙りこくりに、目を通す。もしかしたらこれを灰原に見せたら…期

待が胸を過ぎった。だが数枚ページを捲るうちに、一つのタイトルが気になって、コナンは手を止めた。日付はつい数ヶ月前。灰原が組織から逃亡した後のものだ。

「マウスにおける実験報告：ある研究員により、驚くべき事実が判明した。目的と違う道へ外れたあの出来損ないの名探偵が引き起こす作用と稀に発現する副作用。そして副作用を経験したマウスは」

読み進めていくコナンの顔はだんだん険しくなっていた。ジョディは静かに車を走らせ、赤井はじっとコナンの表情を伺う。やがてコナンは書類の束から目を離し、苦しそうに空を仰いだ。

「その書類の意味、私達にはどうしても解らないのよ。一応信頼できる研究チームに調べさせてはいるけど、聞いたことのない薬品だし…。君、何か知らない？」用心深く低く重い声で振り向いたジョディに、コナンは唇を動かした。

「今…は、い、言えな…い」

体内に残るわずかな酸素と一緒に吐き出す。顔面蒼白のコナンに、赤井が心配そうに手を貸した。

「何処が悪いのか？」

「入院中でかなり体力落ちたはずだから、合併症かしら？ 病院に着けましょうか」

二人の言葉に静かに首を振る。優れない体調の理由。

研究日誌の一ページで既に答えは見つけた。そのページの最後に

書かれていた辛辣な言葉―。

”あらゆる苦痛の波に襲われ、最終的に息絶える”

灰原にもシャロンにも起こりえない副作用。その理由は、無防備にも書き込まれていた。コナンは強く唇を噛んだ。悲運な運命を呪うように唇から鮮血が流れ始めた。

FILE. 2 秘密文書（後書き）

さて、いよいよ体調を崩し始めたコナン。

未だ疑う蘭、そして思うように動かない身体、

”研究日誌”の存在：

コナンを絶望させたのは何で、

日誌を作成したのは誰なのでしょう？

作成者については数話の間に明らかになります。

”灰原とシャロンには起こりえない副作用”

これは大きなヒントです。

今後深く関わってくるのでご注意を！

4／14 修正 深月姫季

近況○看護専門学校とコンビニバイトの両立はお勧めしません…

一月で8万稼ぎます。勉強と執筆の暇がないです（笑）

FILE. 3 君がいない（前書き）

サブタイは今は亡き大好きなある歌手の代表作から。

FILE. 3 君がいない

コナンがFBIと接触して三日後、哀はシャロンと共に阿笠邸の地下にある研究室でAPTXのデータを解析していた。薬学に通じているシャロンの力を借りて、ささやかながら、解毒剤の輪郭が見えつつある。立派な前進だろう。

「そろそろ休憩にしたらどうじゃ」

阿笠博士が良い香りを漂わせ手に盆を持って入ってくると、二人は作業を止め、挽きたてのコーヒーを受け取った。

「どうじゃ、解毒剤の方は」

「叔母さ…いえ、シャロンのお陰でかなり進んだわ」

シャロンは口元をコーヒークップで隠しながら満足そうに微笑んだ。哀はシャロンに軽くにらむ素振りを見せた。一連の行動の意味が解せず、はてな、と首をかしげた阿笠に、哀は耳打ちした。

「40に差し掛かると女は”おばさん”と言う言葉に敏感になるのよ――」

どうやら二人の間で呼び名について一悶着あったらしい。シャロンが口を開きかけたが、その言葉は執拗なドアベルで掻き消された。それだけではない。三人が慌ててリビングに上がっていくと大声と共に力任せに打ち付けられる拳のせいで、ドアが大きく揺れている。

「工藤！工藤オォ！…おるんか！返事しい」

「博士、開けたほうがいいんじゃない？ あの西の名探偵がドアを壊しそうよ」

哀の指摘に、呆気にとられていた阿笠は我に振り返りサンダルをつっかけ、慌ててドアを開けた。

「どうしたんじゃ、平次君。そんなに慌てて」

息を切らした平次は、何度か金魚のように口をパクパクさせたあと、ようやく途切れ途切れに喋り始めた。

「く…工藤、お、おるか!？」

「彼なら来てないわよ」

腕組みをして壁にもたれている哀と、その横にいるシャロンを見て、平次は目を白黒させた。

「来とらんやと…？ お、クリス・ヴィンヤードが何でここにーってそんなんでもええわ！ 今毛利のおっさんここで工藤は暫くここに泊まるっちゅう話聞いたんやけど、やっぱり嘘やってことか」

哀が眉を寄せた。

「嘘？」

何がいいたいのと言わんばかりに哀は色黒の少年に突き刺さるよ

うな視線を向けていた。

「工藤からアメリカに帰るっちゅうメールもろたんや…暫く帰らんからたまにはあんさんやおっちゃんとか覗いてくれって書き添えて…」

全く知らない話に、哀は阿笠を見る。だがその驚きの表情に尋ねるまでも無く、寝耳に水なのは自分だけではないと悟った。

「何や急な話やな思て電話しても出えへんし、様子が変やし、和葉ほっばらかして来てしもた」

「そういえば、一昨日少し顔を見ただけでそれから会ってないわ」

黙りこくった二人にチラリと視線を送りながら、シャロンが初めて口を開いた。

「俺にメール来たんも一昨日や。足取りが掴めん、っちゅうことか！」

「アメリカ、と言ったのなら、有希子が知っているかしらね」

激昂した平次に助け舟を出すように呟いたシャロンに、阿笠が顔を上げた。

「確か引き出しに連絡先のメモがあったはずじゃ」

平次は携帯を開いた。

「携帯には繋がらんわ…工藤のオカンとこにかけるしかないなあ」

FILE. 4 哀愁郷愁

アメリカのカリフォルニア州―ロサンゼルス。アメリカの都市の中でニューヨークに続いて人口の多い街。車が多く行きかうビル街から外れた郊外に、それは在った。白く、真新しい十字架。そして英語で彫られた文字。

” 工藤優作此処に眠る ”

有希子はその字をなぞりながら、薄く涙のにじんだ瞳からそれを落とすまいと、花輪を十字架にかけ、空を見た。そして、その後ろに佇む少年の影。その影が揺れた。石碑に向き直って跪き、軽く拳を叩きつける。

「父さん、馬鹿だよ…」

ジョディから受け取った、組織のボスの司法解剖結果。身体に残る穴は二つ。一つはおそらくジンが撃ったもので、脇腹を抉った遠くからの銃弾。だが致命傷となったのは、丁度左胸に撃ち込まれた、ごく至近距離からのもの。皮膚には発砲したときに出来たと思われる火傷。そう、自分自身で楔を打ったのだ。逃れられない宿命に。

コナンはFBIの面々と共に、アメリカに来ていた。戸籍が無い以上、通常なら海外へ飛ぶことは出来ない。だからこそ、FBIの帰国と同時に潜り込んだのだ。ポケットの中で携帯が何度も震えたが、無視し、コナンは暫くの間心の中で呟いていた。今は亡き父親へ。

「行きましょ」

有希子に促され、立ち上がる。墓の横に咲く名も無い小さな花がゆっくりと揺れ、心を感傷的にさせる。二人はタクシーに乗り込んで、優作が立てた別宅へと向かっていた。

ロスでの夫婦の住まいだ。

十分ほど過ぎた頃、立ち並ぶ郊外の別荘地が姿を現し始めた。いかにも高級感漂う屋敷の中、中々センスあると頷けるある白い木の館。その前で有希子が流暢な英語でタクシーを止めた。支払いの間、鍵を受け取ったコナンはレンガ造りの階段を上がり、白木作りの扉を開ける。初めて訪れたと言うのに、暖かく迎え入れられている気がした。

「父さん…？」

ほとんど意識せず呼びかけていた。鮮明に残る独特の家の香り。内装は全く異なるにも関わらず、まるで米花町にいるような錯覚を覚えてよろめく。

…感傷に浸っている暇はない。震え続ける携帯の液晶は不在着信や未読メールのお知らせで埋められている。

コナンは電話機に手を伸ばした。ワンプッシュもおかずに先方から不機嫌そうな声が漏れた。

「工藤オ、何しとんねん！今ちょうどアメリカにかけるとこやったで」

電話機を突き破ってこっちまで来てしまいそうな勢いに、思わず受話器を耳から離す。

「悪い悪い：忙しくてよ、今はロスに来てんだ」

「急にアメリカってどうゆうことや。しかも茶髪のねえちゃんたちにも何にも言わんと」

「灰原：？」

そう言えば受話器の向こうで話し声が飛び交っている。

「お前まさか、博士んちに：」

「今日ついたとこやで」

平次の行動力の素早さに目を丸くしながらも、有希子が入ってくる音がしてコナンは声をひそめた。

「まあ、丁度良かったってとこか。オレはしばらく日本には帰らねえから、灰原に伝えといてくれ」

「事情説明しい、急に消えて意味解らんで？」

苛々したような平次の口調に構わず、一言伝える。

「多分明日ぐらいにそっちに差出人不明の小包が届く。早急にそれを完成させてくれ。それだけ伝えてくれ。じゃあな、服部」

これで、何とかなるかもしれない。コナンは射し込んできたわずかな希望に胸を高鳴らせた。

FILE. 4 哀愁郷愁（後書き）

長引きそうです。

FILE. 5 不可解な事実

背中に視線を感じながら、にべもなく切られた電話を平次はただ呆然と見つめていた。

「新一は何と言ったんじゃ」

固唾を飲んで見守る三人に、平次は困ったように眉を寄せた。

「忙しい：明日小包がこっちに着くからそれを完成させてくれ、それだけや」

何も聞かれたくないかのように、早々と切られてしまったことにショックを受ける。自分は今まで何度もコナンの相談に乗ってきたし、互いを高めあうかのような関係が気に入ってもいた。だからこそ今回の騒動に、どう対応しているのか、今の平次には推し量る事が出来なかった。

「とにかく小包が届くまで待ってみましょ：彼から何も情報が無い以上、考えていても始まらないわ。博士、私たちはもう少し研究室にいるから」

哀が欠伸しつつシャロンと階段を下りていく足音を聞きながら、残された男二人は顔を見合わせてため息をついた。

そしてその翌日。春休みに入ったから、と平次はしばらく阿笠邸に滞在する事を即決した。必要なものを買ってくるといそいそと買い物などへ出かける彼を見送りながら、哀はまた騒がしくなるわと大きく息を吐いた。シャロンは仮眠中、哀は一息吐こうとコーヒー

豆を棚から下ろす。

「小包です」

ドアベルと共にもたらされたそれに、哀が腰の重い阿笠の代わりに早足で玄関へ向かった。気の良さそうな配達夫は帽子のつばを触りながら帰り際躊躇いがちに口を開いた。

「差出人が不明ですが、心当たりはおありですか」

哀はフツと笑みを漏らした。

「うん、大丈夫だよ。お兄さんありがとう」

ハキハキした子供の振り。箱の中を早く見たいという気持ちに駆られ、ニツコリと笑いかけながらも急いでドアを閉める。そう大きくない、小学生サイズの哀が持てる段ボール。ただ、何が入っているのかずっしりとした重さが、哀の両腕にかかった。居ても立ってもいられずに、一足早く玄関先で乱雑に封じられたガムテープを千切ると、一番上に複雑な化学記号の並んだ書類、その表題が目飛び込んできた。

” APTX4869の成分解析”

予想だにしなかった資料に胸が弾む。

一ページ捲って、哀は息をするのも忘れてしまった。それは癖のある、懐かしい字で埋め尽くされていたからだ。

「この日記の字…」

懐かしいのも当然の筈。研究中に亡くなった父、宮野厚司の筆跡だ。

その書類束にはかなり詳細なデータが記されていて、これがあれば解毒剤の調査もはかどることだろう。頬を上気させながら読み進めるうちに、突如哀は気味の悪い違和感に襲われた。霞みがかった思考力で精一杯どこに違和感を抱いたのか検証する。几帳面に細かく並んだ字。だが、何の変哲もないはずの日付に目を奪われ、哀は愕然とした。そして、その章を読み進める。

「嘘…ある筈がないわーだって」

”○月14日 まさか彼女が逃げ出すとは思わなかった。我々にとって貴重な人材だったのだ”

”○月25日 彼女がいなくなり、私が自ら研究を続ける。投与したマウスに明らかな変化がー幼児化している。遺伝子に何らかの作用が起こる可能性”

その次のページから数枚分真新しく破られた形跡があった。だが哀にはそこまで考える余裕などある筈が無い。哀が組織を抜け出した後の出来事まで、鮮明に書き連ねてあったのだ。死んだはずの父が生きて、自分の研究を引き継いでいた。哀はその事実を素直に喜べなかった。パラパラと捲ると、最終ページに詳しい成分、薬品が写し取られている。

「…これで解毒剤が作れるわね」

哀は急ぎ足で地下へと戻っていった。ざわざわと波立つ心を抑え

ながら、とにかく今は解毒剤を完成させることだけを考えよう、
そう誓った。

FILE. 5 不可解な事実（後書き）

久々に更新。

29日に友達と映画観る予定です。

今からは目の前にあるたくさんの医学書とにらめっこ：

最近の一連の騒動で執筆という事に嫌気がさしました。私は酷評推進派なので。

酷評をする人を酔ってたかって匿名の人が大勢で嫌がらせ：これじゃあまりにもお粗末じゃないか：

今回の騒動を重く受け止めて、

自分はやりわりとした口調で酷評したいなと：（同じ？）

自分も酷評頂いてもっともっと成長したいですし！

まあ頑張ります。

余談..

看護学校、課題出すぎ：

バイトも毎日入ってますO

5万のはずが8万以上稼いでしまいました：

本当に更新できなくてごめんなさい。

それでも読んでくれる皆様、ありがとうございます！

FILE. 6 時を刻む

一週間が経過した。コナンは身分が危うい手前、ほとんど赤井と行動を共にしていた。主に日本だけじゃなく海外の近頃起こった奇妙な事件を洗い出し、組織の残党が関わっているような事件に目を光らせるか、研究日誌の原本から色々と推測するに留まり、新発見などはない。そして今日も、コナンは別邸に赤井を招き、テレビなどのメディアにかじり付くことに終始している。

「静かなもんだ」

「そうだね」

英字新聞に目を落としながら相槌を打つ。これと言って目立った事件はない。FBIの面々はわざと、人目につく成田空港から発った。これは、組織の面々が動き出す事を想定しての行動だったが、何事も無く帰国した。同時に、その後どこでも彼らが動いた様子は無い。

「ねえ、赤井さん」

「何だ、ボウヤ」

「組織は壊滅したのかな」

コナンの眼鏡が曇った。

「…そう思うか？ 奴らのしぶとさを知っているのはボウヤも同じだと思っていたが」

自信を失いかけているコナンに、対等な言葉をかけてくれる。やっぱりこの人は凄いなと思う。

「そうだね：奴らが今回のことで手を引いたなんて思えない。調べられない」

自分に言い聞かせるような科白。近頃苦しむ時間が増え自分の命はいつ尽きるか解らない。せめて尽きる前に、灰原たちが安全に暮らせるように、自分が組織を潰してやる。そう思いなおした。

「時間はたっぷりある。もう少し様子を見るんだ」

赤井の言葉に、コナンは少し顔を曇らせた。

「どや、解毒剤は完成しそうか」

平次が研究室に入ると、哀は明らかに迷惑そうな顔をした。当然だろう。ここ数日、研究室に入り浸っては、薬品などを眺め、これええわーだの、ぎょうさんあるなあなど、感嘆の声を飛ばしていた。早く完成させようと躍起になっている哀の前で、である。注意してもめげずに様々な口実を作ってやってくる平次に閉口し、ここ数日は冷ややかな視線で見つめる程度にしていた。

「誰かさんの邪魔さえなければ、もっと集中できるんだけど」

睡眠不足がたたり、少々口調も荒くなる。だが、平次は臆する事も無く無邪気な笑みを浮かべた。

「きついなあ、ねえちゃんは！ まあ気にせんとき。邪魔する気はないで。ただ変わったものが多いさかい、ちよっと気になんねん」

「もう限界：ちよっと仮眠取るわ」

哀は大あくびしながら部屋を出て行った。ここ二、三日はまともに眠ってないからそつとしといてあげなさい、薬品棚からひよっこりと顔を出したシャロンにのけぞる。ビーカーを取り出し、彼女が酒の成分を抽出し始めると、平次は興味深々に部屋の片隅にある椅子に腰掛けた。この作業を始めてからはや数日、白乾児を始め、酒を片っ端から収集し、どの酒が一番適した成分を持っていたとどれだけ多くの量抽出できるのかを調査していた。酒は成年であるシャロンが目立たないよう変装して調達する。新しく設置された三つの棚には、所狭しと何十種類もの酒が並んでいる。

「ビールにワインにシードル、日本酒に紹興酒…なんや、国籍バラバラやな。三つ棚買って来い言われたときは、国別でわかるんやろと思たけど…」

不思議そうな平次にシャロンが口を開く。

「分類に分けてるのよ」

「分類？」

「そう、今貴方が見てた棚にあるお酒は原料をそのまま発酵させたもので、醸造酒と呼ばれるの。そして貴方の右の棚は蒸留酒。ジンやウォッカ、コロン、それにテキーラも含まれるわね」

耳慣れた言葉に平次は苦笑した。

「あんまり聞きたくない言葉やな…そや、ならこっちの棚は何や？」
指差したもう一つの棚には、シャロンの方が苦笑いした。

「リキュール類。つまり私のことね」

「ベルモット、っちゅうわけか。それにしてもあんさんは俺が知る最高の女優やで」

気さくに話しかけてくる平次に、シャロンはある少年をダブらせていた。

「嬉しいわね…女優は昔からの夢だったから。」

「夢？やっぱハリウッドとかに憧れたんか？」

知らない世界の話題に興味をそえられるのは、シャロンの身に纏う洗練された素顔のせいだろうか。

「姉が幼い私をお芝居に連れていってくれて、いつの間にかその中の世界に入り込んでしまったの。張り詰めた舞台の空気が魅力だったのね。その時からいろんな本を読んだわ…文章を知るために」

遠い目をした彼女の気持ちに手が取るようにわかる。唯一の肉親

を失って復讐を心に誓ったとき、もうひとつ、初めて自分でつかみ取ったものを手放したのだ。

女優という夢を。

平次はブラウン管でみたクリスとしての彼女ではない落ち着いた様子の彼女に、どこことなく哀愁を感じて切なくなった。

「さ、もうひと頑張りよ。貴方も手伝ってくれる？」

「もちろんや」

二人は笑みを交し合い、部屋の中に打ち解けた空気が流れていった。敵としてのベルモットは、もう存在しないのだ…。

FILE. 6 時を刻む (後書き)

久しぶりの投稿です。また一話から読み直していました。
読者のみなさん、ありがとうございます^^

時間はたっぷりある赤井や平次たち
そして残された時間を気にするコナン：

私の中ではこの頃時間が飛ぶように早く過ぎます。
一日がもっと長ければいいのに：

FILE. 7 不穏な足音

「ジンね？」

女は携帯のスピーカーをオンにして、革張りの真っ赤なソファに荒々しく腰をかけた。直ぐに何の表情も無い声が聞こえてくる。

「奴らが巢に帰った。運命の前に跪くしかない非力な探偵は赤井とロスに逃げた。狙うなら未だ」

「そう：指示したとおり、くれぐれも傷つけないでね。今度ばかりは言いつけを守ってもらおうよ」

念を押して電話を切ると女の甲高い笑い声が響いた。

「私は私の大事なものを取り返すだけよ…あの子がいれば、全てが叶う」

そう、昔のような端正な顔立ちも、家族も、権力も全て――

女の顔の右半分は不幸な事故によって醜く爛れ落ち、隠すように下ろした髪が揺れていた。女は鋭い瞳をもっと引き締め、机の上の写真に向かって指鉄砲を放った。

「パーン」

写真の中で笑っている小さな少女たち。女は満足げに舌を舐めると、クロゼットの方に歩み寄り、着ていく服を選び始めたのだった。そう、再会はすぐそこまで来ているのだから。

「兄貴、どうしたんですかい」

ウォッカは苦虫を噛み潰したような顔のジンにライターを持つ手を差し伸べた。直ぐにジンの煙草に火がつき、ジリジリと音を立てる。米花埠頭に二台の車が並んでいた。一台は愛車ポルシェ。差し詰め幹部会議と言ったものだろう。

「ジン、あたいたちの仕事は何だい？　もう邪魔は入らないしワクワクするよ」

金色の見事な断髪を触りながら、キャンティがジンに視線を送る。

「あの方が直々に動く。俺達はシェリーを無傷で連れて来いとお達しだ：」

「無傷？　そんな生温い仕事をあたいたちに頼むのかい？」

憤慨したキャンティにコルンが珍しく口を開いた。

「頼むんじゃない。俺たち、命令されるだけ。それに、下っ端、もういない」

苛々と鼻を鳴らすキャンティにジンは明らかな侮蔑の視線を投げた。

「―わかったよ：おとなしくしてるよ。どうせ狙撃手は不要なんだろ？」

スナイパー

降参というように両手を上げたキャンティに、ジンは表情を和らげる。だが、釘を刺しておくのは忘れなかった。

「お前達は知りすぎている。裏切るなら覚悟を決めておけ」

キャンティは心の中でジンを毒づいた。死をチラつかされても、今やベルモットは生還したし、FBIに情報を渡して消えたキールの居場所は依然掴めていないのだ。まるで説得力が無い。無性に腹立たしい気持ちを抱えながら、キャンティは荒々しく車に乗り込んだ。

「コルン、早く乗りな！」

轟音を響かせながら車が去っていくと、ジンは煙草を海に投げ捨てた。

「身内ながら…甘い…反吐が出る」

ウォッカはいつに無く薄気味悪い空気を纏っている兄貴分の背中を、ただじっと見ていた。

「行くぞ、ウォッカ。明日一日はあの女の動向を調べておけ。見張られてたら厄介だ」

「わかりやした」

姿勢を正して、頭を下げる。冷や汗を拭いながらウォッカはあの方の命令とはいえ、女二人を攫うという全く意味を聞かされない任務に不安を感じていたのだった…。

FILE. 8 悪夢

哀は研究室でうつらうつらと船を漕いでいた。それも当然の事、二時間ほどの仮眠しか取れていない上、何の説明もなく、突然姿を消した好奇心旺盛な名探偵のことが気掛かりだったのだ。解毒剤の方はひと段落ついて、あとは試飲を重ね、身体にどう悪影響を与えるのかを調査して調整するだけだ。その安心感から、哀はいつしか深い眠りにについていた。

ぼんやりとした世界で、手を繋いで走っている仲睦ましい姉妹、そして後ろから転ばないで、と声をかける両親。夢だと解りながらも、哀は笑って振り向く。やさしく笑うお母さん。そうだ、これは初めて四人で出かけたときの”記憶”だ。自分でも覚えていないほど鮮明に、再現されていく。多忙な両親の突然の誘いに驚きながらも、姉と目を見交わし、満面の笑みを浮かべて車に乗り込んだ。行き先は動植物園。思えば、自分の研究好きはあるときから始まったんじゃないか。ふと浮かんだ疑問は、確信に変わった。次の瞬間、夢は消えて、哀は机から跳ね起きた。かなりの時間眠ってしまったらしく、外はもう暗くなっていた。

「シャロン…?」

肩にかけられた毛布に手をやりながら正面を見ると、今まで哀がしていたのと同じ体勢で、彼女も眠りについていていた。口元を緩め、毛布を肩から外すとシャロンにかける。そして哀は彼女を起こさないように、部屋を出た。首を回し、大きく伸びをする。気分転換に外に出ると、心地良い風が頬を撫でる。

「…お母さん」

寂しそうに呟く。思い出したのだ、さっきの夢の続きにあった、恐ろしい落とし穴を。翌日から、両親は帰ってこなかった。そしてその数日後、二人の姉妹の前に、一人の銀髪の男が現れたのだ。

「両親は帰らない」

浴びせ掛けられた冷水のようなジンの言葉に、ただ目をしばたたくことしか出来なかった。それから二人が両親の死を知るまでに長い年月がかかった。

「集中しなくちゃ…」

言い聞かせるように呟いた言葉が身体に浸透し、たちまち身体が目醒める。哀は顕微鏡の前に立つ。仮眠を取る前にピックアップしておいたいくつかのプレパラートの内、ある一種類が確実に化学変化していた。

「ま、さ、か…工藤く」

哀は青ざめた。その反応は、破滅への序章を知らせる悪魔の呼び声だった。指先が小刻みに震える。動揺を鎮めようと机の上に指を押さえつけたが、次は腕全体が揺れる。

「XY遺伝子にしか作動しない副作用…」

恐ろしい仮説に首を振りながら、慣れた手つきで作業を進める。完成まであと一歩だ。これ以上、自分のせいで犠牲になる人を作りたくない。その一心で、哀は黙々と作業に取り掛かっていた。

「あとは1時間後にこの反応が出れば…完成ね」

哀が倒れるように椅子に腰掛け、息を吐いた瞬間、静寂は突如破られた。窓の外からノックの音が聞こえ、反射的に顔を向ける。

「会いたかったぜ、シェリー」

黒いコートに身を包んだ男の身体から発される得体の知れない冷気が、哀の声を奪った。横には腕利きのスナイパーが待ち構えている。

「自分でここに来い。他の奴らを巻き込みたくなかったらな」

残酷な笑みが、哀の全身を貫く。既に、逆らう術は無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8364d/>

悲壮の狂死曲

2010年10月14日16時40分発行